

伝記
を読もう

近代日本の経済を築いた情熱の人

芝田勝茂・文

渋沢栄一





渋沢栄一

近代日本の経済を築いた情熱の人

芝田勝茂・文



「おまえはまだ子どもだ。どれほどのことができるか、わからないが、やってみてごらん。何ごとも勉強だ。」

「ありがとうございますっ！」

翌日、祖父と別れた栄一は、横瀬村から新野村へ行き、藍の畑を見つけると、大きな声でさげびました。

「おーい！ みなさーん！ 血洗島村の渋沢が来ましたよ。今年も藍を買いにきたんです。こっちに来てください！」

あたりの農民が、数人出てきて、栄一を見てびっくりしています。

「渋沢っていうから来てみたら、まだ子どもじゃないか。」

「とんび鬻なんぞを結って、藍葉の買い付けにきたのかね？」

「おまえさんに藍葉の値打ちがわかるのかい？」

「子どもの相手をしているひまはない。帰れ帰れ。」

ふゆかいそうに農民たちがいいいます。

栄一はびくともしません。逆に、

「この藍畑は、あなたの家のですか？」とたずねました。

「そうだよ。おれの畑だ。りっぱなもんだろ……っていつても、おまえなんかにはわからんだろうがね、ははっ。」

「では、こちらの藍畑は？」

「そっちは、五作の畑だよ。」

「五作さんは、どこにいます？」

すると、みんなのうしろから、手ぬぐいでほっかむりをした農民がぬつとあらわれます。

「おらが、五作だが……。」

五作にむかって、栄一はいいました。

「おどろきました。じつにいい藍ですね。五作さんの、乾燥葉を見せてほしいです。」



「おい！」と、最初の農民が怒っていました。

「おれの畑の藍葉が、五作のところよりできが悪いというのか？」

「残念ですが」と榮一はいました。「あなたの畑には、ちゃんと肥料がやられていない。だから、藍の葉がぜんたいに小さい。しめ粕をやらなかったせいです。これではいい乾燥葉ができませんよ。」

「うっ！」

五作は大喜び。

「すげえ！ さすがは渋沢のぼっちゃんだ。ちゃんと、おらのやり方がわかってらっしゃる。」

交渉はあっというまに成立しました。

「では、五作さんの藍をぜんぶまとめて、五両で買しましょう。」

「おお、ちゃんと書き付けまで持ってきてる。りっぱなもんだ！」

「父の代理だという署名もしてあります。」

「五両なら、喜んで売るよ。」

あれこれやりとりをしていると栄一のおなががぐうつとなりました。

「もしかして、洪沢のぼっちゃん、おなががすいておられるので？」

「ばれちゃいましたか、五作さん。」と栄一は頭をかきました。「朝早くに出てきたものですから。」

「そうですか、そうですか。じゃあ、ぜひ、うちで昼めしを食べていっておくんなさい。」

「いいんですか？」

「もちろんですとも！」

五作の家の縁側で、栄一は深谷の名物「にぼうと」をふるまわれました。「ぼうとう」という、うどんのような食べ物煮てあります。

「ねぎが甘いなあ。味噌の味ともよくあいます。それにぼうとうは、のどから胃袋につるつるすべりおちていく。なんておいしいんだろう！」

五作も、家族も、みんなにこにこしています。栄一のこと気がいいのでした。

そこへ、村の男たちが四、五人つれだつてやってきました。

「洪沢のぼっちゃん、おらの畑の藍も見てくたせえ！」

「おらの藍も！」

「おらんところも！」

栄一は笑いながらいきました。

「わかりました。ぼくは、この村の藍をぜんぶ買うつもりで来たんだから、みんなの家の畑の藍を見せてもらいますよ。」

おどろいたことに、この日だけで栄一は、新野村で二十一軒の農家から藍の葉を買い付けました。その翌日は横瀬村と宮戸村、またその次の日は大塚島村に内ヶ島村と、どんどん買い入れていったのです。

父は信州や上州での仕事から帰り、納屋いっぱいに積まれた藍の葉を